E-3　日本語における分離 CP 構造と終助詞「わ」の補部選択

森山倭成（神戸大学大学院生／日本学術振興会特別研究員）

要旨：本論の目的は、日本語の主節領域における分離 CP 構造の追究である。日本語の分離 CP 構造の研究では、Rizzi (1997) のカートグラフィーの枠組みが前提とされることが多い (Hiraiwa and Ishihara (2012); Endo (2007); 遠藤・前田 (2020) など)。しかし、Rizzi (1997) のカートグラフィーは、主にイタリア語のデータに基づいて議論が組み立てられているので、日本語の CP 領域も Rizzi (1997) が提案する [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{TopP*}}$ [$_{\text{FocP}}$ [$_{\text{TopP*}}$ [$_{\text{FinP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……]]]]]] の構造を有しているとは限らない。日本語の CP の階層構造を明らかにするためには、日本語の言語事実に動機付けられた階層構造を追究する必要がある。本論では、日本語の言語事実に基づいて、日本語における分離 CP 構造として [$_{\text{SRP}}$ [$_{\text{EP}}$ [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{MP}}$ [$_{\text{AddrP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……T]]]]]] からなる五階建ての階層構造を提案する。さらに、終助詞の「わ」の新たな統語分析を提案する。「わ」は MP の主要部に基底生成され、ForceP に主要部移動すると主張する。また、Saito and Haraguchi (2012) は、「わ」は TP を補部に取るとしているが、本論では、「わ」が AddrP を補部に取れることを示す。

1. はじめに

Chomsky (1986) は、TP の上位に CP という単一の投射を仮定している。一方で、Culicover (1991) や Rizzi (1997) などは、CP 領域は単一の投射ではなく複数の投射から構成されると主張している。CP を分離させる立場は分離 CP 仮説 (split CP hypothesis) と呼ばれる。日本語の文末要素は分離 CP 仮説に対して示唆的な言語事実を提供する。(1a) では、時制要素の「た」の右側に「っけ」・「か」・「な」、(1b) では、「わ」・「よ」・「ね」が現れている。複数の文末要素が共起できることから、日本語の CP 領域は複数の投射から構成されていることが示唆される。

(1) a. 何だった-っけ-か-な。　　b. そうだ-わ-よ-ね。

そうすると、次に問題となるのは、日本語の CP 領域がどのような階層構造を持つかである。本論では、CP 領域に基底生成される文末要素の語順を手がかりにして、主節における CP 領域の階層構造を追究する。以下のような五階建ての階層構造を提案する。

(2) [$_{\text{SRP}}$ [$_{\text{EP}}$ [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{MP}}$ [$_{\text{AddrP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……T] です] っけ] か] よ] な・ね]

2. カートグラフィーと日本語の分離 CP 構造

2.1. 三タイプの文末要素

日本語の CP 研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞・補文標識が個別的に研究されてきた。本論では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞の階層関係を主な考察の対象とする。

丁寧語には、TP より下位に生起して CP 領域に主要部移動するもの (丁寧語 A) と CP 領域に基底生成されるもの (丁寧語 B) とがある (Miyagawa (1987); 森山 (2021))。丁寧語の生起位置は、時制要素との相対的語順から確認できる。丁寧語 A は、(3) のように、時制要素の「た」の左隣に現れ、丁寧語 B は、(4) のように時制要素の右隣に現れる。

(3) a. 太郎は学生でした。　　b. 太郎は走りました。
(4) a. 今日は楽しかった-です。　　b. 太郎は来なかった-です。

Miyagawa (1987) に従い、丁寧語 A は、(5a) のように、CP 領域に主要部移動すると仮定する。丁寧語 B は、(5b) のように、CP 領域に基底生成されると想定する。

(5) a. [$_{\text{CP}}$ [$_{\text{TP}}$ …….~~*des/mas*~~] *des/mas*]　　b. [$_{\text{CP}}$ [$_{\text{TP}}$ …….] *desu*]

本論では、CP 領域に基底生成される要素同士の階層関係を明らかにすることを目的としている

ので、丁寧語 B のデータに基づいて議論を進める。

次に、モダリティ要素については、MP という投射と関係付けられると提案されている (Koizumi (1993); 上田 (2007); 岸本 (2011) など)。(6a) に例示されるように、話し手の判断を表すモダリティ要素の「だろう」は終助詞の「か」と共起できる。このことから、Koizumi (1993) は、CP 領域を二分割し、MP と CP の投射を立てている。「だろう」は MP の主要部に置かれる。

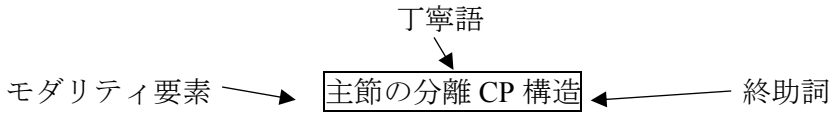
(6) a. 太郎は来る-だろう-か。　b. [$_{CP}$ [$_{MP}$ [$_{TP}$……] *daroo*] *ka*]

最後に、終助詞については、Saito and Haraguchi (2012) が興味深いデータを提示している (Endo (2007), 遠藤 (2010) も参照)。(7a) のように、「わ」・「よ」・「ね」がこの語順で現れることから、(7b) のような階層構造が仮定されている。

(7) a. そうだった-わ-よ-ね。　b. [[[[$_{TP}$ …] Assertion (-*wa*)] Assertion (-*yo*)] Soliciting Response (-*ne*)]

以上のように、主節の CP 領域に関する研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞が個別的に研究されてきた。そうすると、それらの研究成果をどのように統合するかが次の研究課題となる。

(8)



なお、日本語の CP 研究では補文標識の研究も進められている (Saito and Haraguchi (2012); Saito (2015) など) が、本論では、主節の分離 CP 構造を明らかにすることを目的としているので、埋め込み節の階層構造については深く立ち入らない。

2.2. CP 領域の階層構造とカートグラフィー

分離 CP 仮説に基づく日本語の研究では、カートグラフィーの枠組みに依拠した研究が多い。特に、(9) に挙げる Rizzi (1997) の階層構造が前提とされることが一般的になりつつある。

(9) [$_{ForceP}$ [$_{TopP*}$ [$_{FocP}$ [$_{TopP*}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ ……]]]]]]

例えば、Hiraiwa and Ishihara (2012) は、(10) のような階層構造を想定して、議論を展開している（遠藤・前田 (2020) も参照）。TopP の構造位置は異なるが、CP 領域が ForceP, TopP, FocP, FinP から構成される点では、Rizzi (1997) と共通している。

(10) [$_{TopP}$ [$_{ForceP}$ [$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$……]]]]]

しかし、Rizzi (1997) のカートグラフィーは、主にイタリア語のデータに基づいて議論が組み立てられているので、日本語の CP 領域も Rizzi (1997) が提案するような階層構造を持っているとは限らない。

また、遠藤 (2010) は Cinque (1999) のカートグラフィーを終助詞の階層構造に応用している。(11) の階層構造を基に、終助詞の「わ」・「な」・「よ」・「ね」に対して、(12) のような階層関係を仮定している。

(11) [*frankly* Mood$_{speech\ act}$ [*fortunately* Mood$_{evaluative}$ [*allegedly* Mood$_{evidential}$ [*probably* Mod$_{epistemic}$ [*once* T (Past) …　（Cinque (1999: 106) より一部抜粋）

(12) [[[[[…….] わ $_{Epistemic}$] な $_{Evidential}$] よ $_{Evaluative}$] ね $_{Speech\text{-}Act}$]

ところが、この分析は、(13a) が文法的になることと (13b) が非文になることを誤って予測する。

(13) a. *太郎は学生だ｛なよ／なね｝。　b. 太郎は学生だよな。

Cinque (1999) と同じように副詞を用いて階層構造を追究するのも一つの方向性ではあるが、日本語は自由語順を許す言語なので、副詞のデータは有効でない可能性がある。(14) は、副詞の「幸運にも」と「昨日」の語順を調べたものである。(11) の階層構造に基づくと、「幸運にも」は $Mood_{evaluative}$、「昨日」は T (Past) に関係付けられる。この階層関係が正しければ、「幸運にも昨日」の語順でのみ容認されることが予測される。実際、(14a) は容認可能である。ところが、(14b) のように、反対の語順でも容認される。日本語では自由語順の特性が関与してくるため、副詞の語順からは Cinque (1999) の階層構造が日本語でも成り立つかどうかを確定させることができない。

(14) a. 幸運にも昨日彼に会えた。　　b. 昨日幸運にも彼に会えた。

このように、カートグラフィーの枠組みに基づく CP 研究では、他言語のデータに基づいて組み立てられた階層構造を日本語の CP 領域に敷衍することが行われてきた。一方、日本語の言語事実に基づいて階層構造を構築することはあまり行われていない。日本語の CP 領域の階層構造を解明するには、日本語のデータに動機付けられた分離 CP 構造の研究が必要である。

ただし、日本語のデータを基にした文末領域の研究が全くの皆無であるわけではない。澤田 (1993: 167) は「重層モデル」と呼ばれる階層構造を提案している。

(15) [S^2 [S^1 [S^0 [VP …V^0] Tense (る、た)] Modal (（よ）う、だろう、まい)] Prt (終助詞)]

日本語の言語事実に動機付けられた階層構造を提案しているという点で重要であるが、丁寧語が (15) の構造においてどこに位置付けられるのかという点や終助詞を一つの投射 (S^2) にまとめてよいのかという点が疑問として残る。

次節では、文末要素の「です」・「っけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」に着目し、日本語の言語事実に動機付けられた分離 CP 仮説を提案する。なお、本論では、カートグラフィーの枠組みを採用しているわけではないので、カートグラフィー研究で当然とされている理念や想定に必ずしも従っていないことがあることに注意されたい。

3. 主節の分離 CP 構造

日本語には文末要素が豊富に存在しそれぞれが特異な特性を有しているので、それらの文末要素の間に一貫した法則性を見出すことは容易ではないが、一部の文末要素に焦点を当てることで、CP 領域の分離構造を特定することが可能になる。日本語の分離 CP 構造を明らかにするために、(16) に例示する終助詞の「っけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」、丁寧語の「です」の順序関係に焦点を当てる。

(16) a. 昨日ってエイプリルフールだったっけ?　　b. もう飯は食ったか。
　　c. 面白かった｛よ／ね／な｝。　　d. ハルコは優しかったです。

丁寧語 B の「です」は、(16) の文末要素のうち最も左側に現れる。(17) のように、「です」は他の文末要素の左側に現れる語順でのみ容認可能となる。

(17) a. ハルコって優しかった｛ですっけ／*っけです｝。
　　b. ハルコは優しかった｛ですか／*かです｝?
　　c. ハルコは優しかった｛ですよ／*よです｝。
　　d. ハルコは優しかった｛ですね／*ねです｝。
　　e. ハルコは優しかった｛?ですな／*なです｝。

想起を表す「っけ」は、(18) に示すように、「です」・「よ」以外の文末要素の左側に生起する。(18b) には、意味的な要因が関与している。「っけ」の持つ想起の解釈と「よ」が持つ断定性が整合せず、共起しにくいものと考えられる。

(18) a. 何だ｛っけか／*かっけ｝。　　b. 何だ｛?*っけよ／*よっけ｝。
　　c. 何だ｛?っけね／*ねっけ｝。　　d. 何だ｛っけな／*なっけ｝。

また、疑問を表す「か」は、(19) に見られるように、「っけ」・「です」以外の文末要素の左側に生起する。

(19) a. 本当｛かよ／*よか｝。　b. 本当｛かね／*ねか｝。　c. 本当｛かな／*なか｝。

「よ・ね・な」に関しては、Saito and Haraguchi (2012) の観察がある。終助詞の「よ」は、(20) に示すように、「ね・な」の左側に生起する。また、(21) のように、「ね・な」は共起し得ない。これは「ね・な」が同じ構造位置を占めるためである。

(20) a. 冗談だ｛よね／*ねよ｝。　b. 冗談だ｛よな／*なよ｝。
(21) *学生だ｛ねな／なね｝。

ここまで見てきた文末要素の順序関係を整理すると「です—っけ—か—よ—な・ね」の配列を持つことが分かる。日本語のような主要部後行型の言語において、主要部 β が主要部 α に後行することは、α よりも上位の構造位置に β が存在することを示している。そうすると、左端に生起する「です」は CP 領域において最も低い構造位置に、右端に生起する「な」・「ね」は最も高い構造位置に存在するということができる。

(22) [βP [αP [……] α] β]

ここまでの観察から、本論では、(23) の分離 CP 構造を提案する。SRP (Soliciting Response Phrase) は、応答要求の機能を持つ「な・ね」のような語が現れる投射である。EP (Emphasis Phrase) は、強調を表す「よ」のような語が現れる投射である。(EP は FocP と混同されてはならない。FocP は焦点-前提 (focus-presupposition) の関係を作るのに対して、EP は作らない。) ForceP は、文のタイプ (平叙文、疑問文、命令文など) の指定に関わる句であり、主要部には疑問を表す助詞の「か」が現れることができる (Rizzi 1997)。(命令を表す-*e* や「ろ」、禁止を表す「な」も Force 主要部に現れると考えられる。) MP (Modal Phrase) は、話し手の判断に関わる語が現れる句である。Koizumi (1993) は、「だろう」が MP の主要部に現れるとしている。想起の「っけ」も話し手の判断に関する語なので、MP の主要部であると仮定する。AddrP は、聞き手の属性や聞き手との関係の指定に関与する投射である (Yamada 2019)。丁寧語 B の「です」がこの句の主要部に現れると想定する。(丁寧語 A は AddrP への主要部移動を起こす。)

(23) [$_{SRP}$ [$_{EP}$ [$_{ForceP}$ [$_{MP}$ [$_{AddrP}$ [$_{TP}$ ……T] です] っけ] か] よ] な・ね]

このように、日本語は五階建ての分離 CP 構造を持つ。日本語の CP 研究では、Rizzi (1997) のカートグラフィーが仮定されることがあるが、Rizzi (1997) の階層構造では、丁寧語やモダリティ要素に対応する構造位置が不明である。丁寧語やモダリティ要素の統語特性を捉えるには、AddrP や MP のような専用の投射を仮定する必要がある。

また、ForceP・SRP・EP を分離させず、一つの投射に集約する可能性も考えられる (澤田 (1993))。(24) のように、「か」・「よ」・「ね」・「な」を同一の投射に置く可能性である。この代案のもとでは、終助詞が共起した「かよ」・「かな」・「かね」・「よね」・「よな」は一語化した終助詞として分析される。

(24) [$_{ZP}$ [$_{MP}$ ……] か／よ／ね／な／かよ／かな／かね／よね／よな]

ところが、この分析では、(25) のように、「*よか」・「*なか」・「*ねか」・「*ねよ」・「*な

よ」の語順が容認されないことを説明できない。ForceP・SRP・EP に分離させる立場では、(25) の非文法性を構造的に説明することができる。

(25) a. *冗談だよか。　b. *冗談だなか。　c. *冗談だねか。　d. *冗談だねよ。　e. *冗談だなよ。

また、Miyagawa (2012, 2017), Kishimoto (2013) は、丁寧語 (ないしはアロキュティブ探査子) が CP より上位の Speech Act Phrase に主要部移動すると主張している。なお、CP には疑問を表す「か」が現れることができる。

(26) [$_{\text{Speech Act Phrase}}$ [$_{\text{CP}}$ [$_{\text{TP}}$ … T] C] Speech Act]

「か」　丁寧語

本論の分析で言うところの Force より上位に丁寧語 (ないしはアロキュティブ探査子) が移動することになる。しかしながら、どうして「かです」の語順が許容されないのかを説明できない可能性がある。丁寧語が Speech Act Phrase と関係付けられるのであれば、はじめから「です」が「か」の右隣に現れるオプションがあってもよいはずである。Speech Act Phrase への移動を想定する分析では、(27) が非文になる理由を説明する必要がある。

(27) *ハルコは優しかったかです?

(27)の不適格性は、形態的な要因には還元できない。

(28) Q: 太郎が知りたがっているのはどんなことですか。
A: *pro* 地球がどのようにしてできたかです。

最後に、Rizzi (1997) のカートグラフィーとの比較を行う。(29a) は Rizzi (1997) の構造であり、(29b) は本提案である。ForceP を立てる点では両者は共通している。

(29) a. [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{TopP*}}$ [$_{\text{FocP}}$ [$_{\text{TopP*}}$ [$_{\text{FinP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……T]]]]]]　　b. [$_{\text{SRP}}$ [$_{\text{EP}}$ [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{MP}}$ [$_{\text{AddrP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……T]]]]]]

一方で、本論では、日本語において、TopP, FocP, FinP を仮定していない。TopP は題目移動 (topicalization) が関与する投射である。岸本 (2011) は、日本語の題目は MP の指定部に移動すると提案している。本論でもこの仮定に従う。

(30) a. 太郎は昨日帰った。　　b. [$_{\text{SRP}}$ [$_{\text{EP}}$ [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{MP}}$ XP-*wa*$_{\text{i}}$ [$_{\text{AddrP}}$ [$_{\text{TP}}$ …t_{i}…T]]]]]]

FocP に関しては、日本語では、FocP の主要部に相当する語が存在しないこと、顕在的な焦点移動が存在しないことから不要であると考えられる (Hiraiwa and Ishihara (2012) の FocP 分析への反論については、森山 (2021) を参照)。

FinP については、名詞化辞 (nominalizer) の「の」が Fin 主要部であると仮定されることが多い。しかし、Fin が文の定性 (finiteness) を指定しているどうかは不明確である。(FinP 主要部ではないが、定形節に後続する主要部要素はいくらでもある。) FinP は不要であると考えられる。

(31) 私が購入したのはこの商品だ。

4. 終助詞の「わ」

本節では、終助詞の「わ」は MP から ForceP への主要部移動を起こすと主張する。さらに、「わ」は AddrP を補部に選択できることを指摘する。

遠藤 (2010) が観察しているように、「わ」は CP 主要部の「だろう」と共起できない。Saito and Haraguchi (2012) は、(32a) の事実から、「わ」は TP を補部に取るとしている。

(32) a. *太郎は来ただろうわ。　　b. [[$_{TP}$ ……] わ $_{Assertion}$]

「っけ」・「か」・「よ」・「ね」・「な」・「です」との共起関係を確認すると、「わ」は「です」の右側、「よ」・「ね」・「な」の左側に現れる語順で生起できる。一方で、MP 主要部の「っけ」や ForceP 主要部の「か」とは共起できない。このことは、「わ」が MP および ForceP と何らかの関係を持つことを示している。

(33) a. ハルコって優しかった｛ですわ／*わです｝。
b. ハルコは優しかった｛*っけわ／*わっけ｝?
c. ハルコは優しかった｛*わか／*かわ｝?
d. ハルコは優しかった｛わよ／*よわ｝。
e. ハルコは優しかった｛わね／*ねわ｝。
f. ハルコは優しかった｛?わな／*なわ｝。

本論では、(34) のように、「わ」は MP の主要部として生起し、ForceP への主要部移動を起こすと想定する。(33b) と (33c) の非文法性は、主要部位置の競合によるものである。なお、この場合の移動は、統語部門での移動を想定している。

(34) [$_{SRP}$ [$_{EP}$ [$_{ForceP}$ [$_{MP}$ [$_{AddrP}$ [$_{TP}$ ……T] です] ~~わ~~] わ] よ] な・ね]

主要部移動の移動先に異なる要素が存在してはならないという点は、英語の従属節に関するデータからも確認できる。

(35) a. If anything should happen to you, please call the police.
b. Should$_i$ anything t$_i$ happen to you, please call the police.
c. *If should$_i$ anything t$_i$ happen to you, please call the police.

このように仮定することで、「です」・「よ」・「ね」・「な」と共起した時の語順を捉えることもできる。Saito and Haraguchi (2012) は、「わ」を TP を補部に取る終助詞であると記述しているが、丁寧語の「です」と共起できるので、AddrP を補部に取れると考えられる。
代案として、「わ」は ForceP の主要部であり、AddrP を補部に取っている可能性もある。

(36) [$_{SRP}$ [$_{EP}$ [$_{ForceP}$ [$_{AddrP}$ [$_{TP}$ …….T] です] わ $_{Force}$]]]

話し手の判断を表す副詞の「やっぱり」に関わるデータからこの可能性は排除される。「やっぱり」は話し手の判断を表すため、修飾先を MP とする。「やっぱり」は、(38) のように、「わ」との共起が可能である。このため、(36) のような MP が欠如した構造を採用することはできない。

(37) a. やっぱり太郎は帰った。　　b. やっぱり今日は帰る。
(38) やっぱり太郎は帰ったわ。
(39) [$_{SRP}$ [$_{EP}$ [$_{ForceP}$ [$_{MP}$ やっぱり [$_{AddrP}$ [$_{TP}$ ……T] です] ~~わ~~] わ] よ] な・ね]

5. まとめ

本論では、日本語の主節領域における分離 CP 構造について論じた。日本語に関する CP 領域の先行研究では、カートグラフィーの枠組みを前提とした研究が数多く存在する一方で、日本語の特徴に動機付けられた統一的な分離 CP 構造を追究することはそれほど積極的に行われてこなかった。本論では、日本語の言語事実に基づいて、[$_{SRP}$ [$_{EP}$ [$_{ForceP}$ [$_{MP}$ [$_{AddrP}$ [$_{TP}$ ……T]]]]]] からなる五階建ての階層構造を提案した。また、終助詞の「わ」の統語特性についても議論した。先行研究では、「わ」

は TP を補部に取ると仮定されているが、本論では、丁寧語に後続できることから、「わ」は AddrP を補部に取れることを指摘した。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19J20008 の助成を受けている。

参考文献

Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.

Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford, UK: Oxford University Press.

Culicover, Peter. 1991. Topicalization, inversion, and focus in English. *Proceedings of the 8th Eastern States Conference on Linguistics*: 46–68.

Endo, Yoshio. 2007. *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.

遠藤喜雄. 2010.「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究―命題を超えて』, 67–94. 東京: 開拓社.

遠藤喜雄・前田雅子. 2020.『カートグラフィー』東京. 開拓社.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15, 142–180.

岸本秀樹. 2011.「節の周辺要素―モダリティと題目」 武内道子・佐藤裕美（編）『発話と文のモダリティ―対照研究の視点から―』, 115–137. 東京: ひつじ書房.

Kishimoto, Hideki. 2013. Coordination and movement of honorific heads in Japanese. *19th ICL Papers*, 7, International Congress of Linguistics, University of Geneva, Switzerland.

Koizumi, Masatoshi. 1993. Modal phrase and adjuncts. *Japanese/Korean Linguistics* 2: 409–428.

Miyagawa, Shigeru. 1987. LF affix raising in Japanese. *Linguistic Inquiry* 18: 362–367.

Miyagawa, Shigeru. 2012. Agreements that occur mainly in main clauses. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*, 79–112. Amsterdam: John Benjamins.

Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement Beyond Phi*. Cambridge, MA: MIT Press.

森山倭成. 2021.「日本語の分裂文の統語特性」関西言語学会第 46 回大会, 口頭発表, オンライン, 2021 年 6 月 15 日.

Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281–337. Dordrecht: Kluwer.

Saito, Mamoru. 2015. Cartography and selection: Case studies in Japanese. In Ur Shlonsky (ed.) *Beyond Functional Sequence*, 255–274. New York: Oxford University Press.

Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi. 2012. Deriving the cartography of the Japanese right periphery: The case of sentence-final discourse particles. *Iberia* 4: 104–123.

澤田治美. 1993.『視点と主観性―日英語助動詞の分析―』東京: ひつじ書房.

上田由紀子. 2007.「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』, 261–294. 東京: ひつじ書房.

Yamada, Akitaka. 2019. The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers. Doctoral Thesis. Georgetown University.